ἱλαστήριον
ヒラステーリオン

知っておきたいキリスト教のことば （137）

償い　つぐない

「償い」と聞くと、テレサテンやさだまさしを思い浮かべるという方も多いと思います。一般的な「償い」の意味は、「故意・過失などにより相手に与えた損害や損失の埋め合わせをすること」です。

旧約聖書には自分が犯した罪などから解放される手段として、様々な償いの方法が記されています。「焼き尽くす献げ物」、「穀物の献げ物」、「和解の献げ物」、「賠償の献げ物」などがそれです。人々は罪を犯したり感謝をしたりするたびに、神殿で献げ物をしていました。

また出エジプト記 30 章 10 節には、祭司アロンが年に一度、罪の贖いの儀式を行うことを定めています。さらにレビ記 16 章には、贖罪日の規定が書かれています。それによると、まず贖罪の献げ物として 2 匹の雄山羊を引いてきます。そしてくじを引き、一匹は主のもの、もう一匹はアザゼルのものとします。アザゼルのものとされた山羊は生かしおき、民の罪を負わせ、荒れ野のアザゼルのもとへ放逐します。このようにして、罪を償うのです。

しかし現代に生きるわたしたちは、罪のために献げ物をささげることも、贖罪日を守ることもしていません。それは神さまが罪の贖いのためにイエス様を遣わされたからです。ヘブライ人への手紙 7 章 27 節にはこのように書かれています。

「この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。」

このことにより、わたしたちは罪から解放されました。したがって、神さまに対する罪の償いも必要なくなったということです。

次回は「罪」です。お楽しみに。

「アザゼル」
1825 年版地獄の辞典の挿絵

この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。

（ヨハネの手紙一 2 章 2 節）